

津田 惟雄

の時代、以後物性研設立までを「おたまじゃくし」の時代、以後これまでを「とかげ」か「わに」の時代とすると、これからは「恐竜」の時代といえるのではなからうか、と感じた。一、実際にその恐竜の住み家ともいえるべき建物をまのあたりにみて「なにごとのおわしますかはしらねども かたじけなさになみだこぼるる」の思いに近い思いをし、今やわれわれは、物性研設立に匹敵するような、時代の曲り角にいるのではないかと感じた。

壮大な極限物性計画を具現化するほどに蓄積され高まった日本の物性研究の activity が、正の要素として存在する。他方、「物性研」設立時と比較するとき、いわば「民衆」の受け身の姿勢・消極性・関心の欠如が、負の要素として存在する。物性研が設立されたとき、日本のすべての物性研究者が、物性研を自分たち自身の研究所であると実感したし、また実感しえた。しかし今、巨大な極限物性研究施設を、神々の御殿と感ずることはできても、自分たち自身のものであるとは実感しえていない。このような負の状況の克服が、長期的な見通しに立ったとき、仏造って魂入れるための急務であるように思う。

第1回物性若手懇談会に出席した人々のうちの最年少学年は、M1であった。それらの人々も、今やすべて50才を越えた。物性研設立前夜の熱気と昂揚が、今こそ若手に伝えられ、受けつがれなくてはならない。

四半世紀後、物性研50周年記念式典の参加者が、所内開放でC棟を見学したとき、そこに25年前の物性研絶頂期を象徴する観光的記念碑として巨大なピラミッドとスフィンクスを見るか、今なお次々と熱い炎を吐き出す生きたフェニックスを見るかは、かかって若手の双肩にある。

「私にとって物性研とは」

研究を進めていく上で大変有難い存在で、なければ困るものです。

東京理科大学・応物 津田 惟雄